

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	歴史の片影 : 雑録
Author(s)	長谷川, 貞一郎
Citation	龍南會雜誌, 75 : 16 - 23
Issue date	1899-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5397
Right	

つは、強壯なる兵勇も、猶ほ易しとせざる所とせば、最も僅少なる時間に、尤も嚴肅なる式を畢るは、最も敬憚を表する所以にあらざらんや、簡易嚴肅とは此謂のみ、且つ既に感情の表影は、口を中心の誠に籍て、旁若無人なるを得ず、幾何かは人の尙美性に訴へざるべからずとせば、和服に行て可なるも、洋服に行へば則ち人をして笑を忍ばざるものあらん、掌を加へ体を屈する太甚さか如きは、其避くべき所にあらんか、所謂人の尙美性に訴るとは此義のみ、而も尙ほ其簡に過ぐるを危まば、勅語の奉讀と唱歌の中間に、前進拜賀を行ふも可なりとせん、但前進は數列一齊に行ふも不敬にあらざるべく、拜賀は直立正視儼として思ふか若くなると、不動の姿勢より少く上体を屈すると、孰れに定むるも、不可なる所にあらざんか、若玄後の策に出づれば、有司の拜賀は生徒の前一刻に行ふべく、有司中直立不動の姿勢に達せざる者あらば、豫め徴て以て習はざるも、亦妙なりとせんか、於戲唱歌するものは樂なり、情を合する所以や得たり、何ぞ貌を飾る所以に於て等閑視し去るべけんや、然りと雖、當途の士、聖人にあらざんば禮を讓せず、吾何を敢てせん、以て來者を待つと曰はれ、其は則ち吾の知る所にあらざるなり、(明治卅二年天長節前二日)

雜 錄

歴史の片影

鐵血宰相

教授 長谷川 貞一郎

千八百六十一年普王フレデリック・ウーリッヒが四世死す、弟ウーリッヒが即位す。老帝ウーリッヒが二世是れなり、ウーリッヒは千七百九十七年に生れ、ナポレオン一世時代の戦に出で殆んど四十年間軍務に執掌し、普軍の弱點を熟知す。從來其屈辱を被りては一に軍隊に基因すとなき、其攝政の職にありしとき已に兵制改革案を議會に呈出さ、屢失敗す。此に於て千八百六十二年ヒスマークを擧げて總理兼外務大臣となす。同年九月三十日議會に臨み一演説をなせり、此の演説は乃ち公が鐵血宰相の名を得たる所以なり。左に其の大要を記さん

“ Prussia must collect its strength for the favorable moment, which has already been several times allowed to pass. Prussian borders are not adapted to sound health in the political body it is not by speeches and resolutions of majorities that the great questions of the time are to be decided — that was the mistake of 1848 and 1849 — but by blood and iron.”

King Maria Theresa Queen James, King Elizabeth”

千七百四十一年はオーストリア女王マリア・テレサはフランス、バベリヤスペイン、ブルシャ等の同盟軍に改められハンガリーに奔り、同國議會に臨んで、救を求む。時に議會感激きて皆 “*Mortuus pro rege nostro Maria Theresa*” (Let us die for our king, Mary) 吾人國王マリア・テレサの爲めに死を致さんと叫べり此れハンガリー人は Queen と稱するを嫌ふの風あり女王の即位するも必ず此れに King の尊號を以てせる故なり

セームス一世はスチュアート王朝最初の王にして、身体不具一見愚者の如く、性怯にまて白刃の閃くを欠れば戦き、暗殺を恐れて其衣を pad ぎ。外交政略は主として平和を執れるを以てなり。

エリザベスはチュードル王朝最終の君にして、意志強く、勇敢制し難く、鋭敏判斷力あり。アングリカ
ンチャーチを組織し、メーリー、スチューアートを殺さ、必勝艦隊をして顔色なからえめ、其行爲は
男子も一着を輸するものあるを以てなり。

旅行政略 (Reise politik)

外交政略と云ひ、内治政略と云ひ、又は商業政略、又は宗教政略なる語は、吾人の屢聞く所なり。然
れども旅行政略とは、未だ耳にせざる處なり。そも如何なる政略をか意味する。一昨年夏佛露同盟條
約調印せられたりと云ひ、三國同盟存続の宣言ありたりと傳へ、埃は露と密約する所あり、伊は英に
親しむんとする等の風説ありし頃、歐洲諸國君主の旅行流行し、八月初旬、獨帝は皇后、大宰相、外
務大臣等を携へ、露都聖彼得堡に遊び、露國新聞は『獨帝の來遊は、歐洲他日の平和に對する吉兆な
り』と、歡迎を、佛國大統領は、同月下旬露京に入り、二十六日露帝は、佛國巡洋艦、ボナパルト號を訪ひ、
會食の席上、大統領の健康を祝し、『閣下の弊國に滯留せらるゝは、實に此友誼ある同盟兩國國民の結
合を、更に密接ならしめらるゝものにして、此兩國國民は、共に正義と公朋の心を以て、世界の平和を維
持することに、其全力を用ひしに、覺悟えたるものなり。』と云ひ、次で九月、伊王獨逸に來遊を、獨帝
をハムブルクに訪ひ、伊王は盃を啣みて獨帝の萬歳を祝さ、伊獨兩國の間には、友誼の同盟、依然とぞ
て存すと云ひ、其他伊王と埃國外務大臣、ゴルチヨフスキ、伯との會合、獨埃兩國の會合、英國女皇と
佛國大統領との瀛車中の會談、暹羅王の歐洲巡遊等あり。斯く、各國帝王は、玉座殆んど暖なるの邊
あらざるはとなりき。此に於てビスマークは此の如く、歐洲各國の君主、大臣、屢相會するを見、世間
が何事かあらず氣に騒ぎたぞ。之に重を置き過ぐるの風あるを嘲り、當世政治の順序は、旅行訪問、

賀宴、祝宴にありと、以來君主相互の來訪を冷評して、旅行政略と云へるなり。

トランスバール事件は英國愛國心の發表せる者なるが

トランスバールは英領南亞佛利加(英國は 21,000,000 sq. km. 220,000,000 の殖民地人口を包有す)の間に介立せる一小共和國にして、英國其内治上に於ける參政權の分配に不公平あるに乘し、明治二十九年既に所謂トランスバール事件を起して、獨逸に一驚を喫せしめ、同共和國政府をえて居留民規則を廢せしめ、事僅に休むを得たり。然れども英國政府が北カイロより南ケイプタウンに達する縱貫鐵道を布設して、一方には殖民事業の發達を謀り、一方には印度洋を制して英領印度との交通を確實にせんとするは夙夜忘れざる所なり。故に昨年はラフシヨダに關して佛國との交渉を始め、今や再び三萬余の英人の屈辱を伸べんとしトランスバールと兵を交へたり。然り而して亞佛利加には佛領あり、獨領あり、葡領あるを以て此の事件は引て歐洲列國の關係を動かし、從て世界の形勢を一變せざる原因となるやも計られざるなり。英國か此の如き亞佛利加經綸策を施行せんとする所以は殖民大臣チエムバーレン氏の所謂愛國心を全うせんとする者か。何をか同大臣の愛國心と云ふ。

明治三十年チエムバーレン氏グラスゴウ大學總長に推され、十二月三日其就任式に當り愛國心に關する一場の長演説を試みたり。其大要は曰く、

古來各國の人民愛國心に類するものを有せざる者にはあらずと雖も、其愛國心たる各其奉する所の君主酋長に對する忠義心に外ならざりし。忠義心にあらざる眞正の愛國心なるものは佛國革命時代に於て始めて一般に認識するに至れり。當時佛國人民は此愛國心を專有したりしが、爲りて能く未曾有の國難を救ひて諸外國を威壓するを得たりと云なり。我英國の如きも此時代よりして始

めて完全なる愛國心なる者を解釋し得、以て立國の柱礎を固うするを得たるものなり。今日英國人民が其愛國心を全うするは英國の天職とする所を認むるにあり、英國の天職とは何ぞや、英國の膨脹是なり。文明の邦國が其境域を開拓して、野蠻の地を收むるは、世界の平和と幸福とを増進せんか爲めに外ならず。世人或は野蠻國征服の殘忍を責むるものあり。然れども之を野蠻人の手に任ぜ置くがために生ずる私闘の慘劇に比するときは殆んど言ふに足らざるなり。且つ國民各其性質と特長とを有せり、此特質と特長とを知れば其天職の在る所を明かに得べし。而て英國人民の特質と特長とは實に境域の開拓、國家の膨脹に恰適せるを以て、英國人民たるものは此天職を盡すに怠らざらんとを要す云々。

故ロバソフ公の遺書とピター大帝の遺言

一昨年十月八日吾人は一のロイテル電報に接したり、曰く「故ロバソフ公の遺書なる者ありて其中に容易ならざる魯國の深謀を吐露するものありとの風説境都ヴァイナにありと」。故ロバソフ公とは前外務大臣にして遼東半島還附の事に關し佛獨を誘うて我國に干渉し、又英のソールスベリ侯の對土政策を拒絶せる前魯國外務大臣にして、一昨年八月三十日に死去せし人なり。次に此の遺書の大要を記さん。

世界に於て露國の最も恐るべき敵二あり、曰く英、曰く獨。然り而て英に對ては露國の亞細亞に於ける鐵道數年後完成すべきを以て其腕には斷然印度に向つて死活に關する一大打撃を加ふべし。此打撃にして若し功を奏せば英國の母國と殖民地との聯絡を全く斷絶せしめ、大英帝國の瓦解期まで待つべきなり。又々獨に對しては、埃匈二國は今后佛國と互に相融和するに至るべきを以て須

らるる佛國と同盟を結ぶべき。

と、當時恰も英領印度に叛徒蜂起、其勢猖獗に於て英軍少く鎮定に艱めるの際に當り、又た露帝は露佛同盟を公言せりとの噂ありたる時なりしを以て歐洲人心大に動搖せり。

擬て右の遺書なる者は果て信か又た僞物なるか俄に判斷する能はざれども、此れにつきピーター大帝の遺言なる者と思ひ出せるを以て、次に之を記載せん、(此の遺言は千八百三十六年佛人 Guiliardes の著書に見へたるものにて、其僞物たる證は獨逸の史學雜誌に出づ)

一、露國の版圖を擴め、其隆盛を謀らんが爲め、國民を以て常に戰時の思ひ有らざる可き。此れ兵士を以て、勇武強壯に、殺氣凜々たらしむる所以にして、又た好機の乘すべき者あれば、直に出陣を易からしむる所以なり。

二、あらゆる手段を盡して、歐洲開明諸國より、戰時に在ては士官、平時に在ては學者を招聘すべし、此れ露國民を以て、自國の一物を失はず、以て他國の利益を收得せざるの道なり。

三、歐洲各國殊に魯國の隣邦に於て魯國民の最も直接に利害を感ずる獨國に起りたる紛議騷擾に嘴を容れんとを、つとめ決して其機に遅るゝなかるべき。

四、ポーランド國には、由來嫉妬紛擾あり。故に常に此を刺撃、以て國內を分裂し、有力なる官吏は暗はすに利を以て、以て魯に與せざる、議會を腐敗せしめ、以て國王の撰擧を困難ならざる、徐々て魯國黨を作り、次で魯兵を送り、永久ポーランド國內に、駐在し得るの口實を求むべき。若し、隣邦異議を提出せば、先づきはらくポーランド分割策を講じて、其心を和らげ、機を待て此分割領を取り之を露領に合すべき。

五、吾人は、スウェーデンより、多くの土地を得んことをつとめ、先づ彼國を激え、我に對えて戰を挑ましめ、以て我の彼を征伏するの口實を作るべし。此の目的を達せんがため、スウェーデンハデン、イタ二國を離間し、相爭はしむへし。

六、魯國王子の妃は、常に獨國の皇女中より撰まざるべからず、此れ我と獨國との姻戚を増し、利害を共にせしめんが爲めなり。而て獨國に於ける我勢力固く、獨國は自ら我政略に賛同するに至るべし。

七、我國と英國との商業上の聯合を作るを怠るべからず。何んとなれば、英國の海軍は我國の生産物を仰ぐと多く、又た我海軍發達上、大裨益を與ふるものなればなり。是を以て、我の材木、其他の物品と、彼の金とを交換え、永久兩國の水夫商人の親交を計るべし。

八、吾人は我國境をバルチック海に、南黒海に擴張せんことをつとむへし。

九、吾人は力を盡してコンスタンチノーブル及び印度に逼るべし、世若し此の二地を占領する者あらば眞に天下の實權を握るを得るなり。此故に吾人は或は土耳其を激し、或はペルシヤを怒らえ、常に此二國と争はざるべからず。又々黒海に造船所を設け、黒海並にバルチック海の海權を握り、

又ペルシヤの滅亡を促え、ペルシヤ灣に侵入し能はずんばシリヤを通過して、古代レヴァント貿易を再興し、次て世界の寶庫たる印度に逼り、此を占領せば、又た金を英國に仰ぐの要なきなり。

十、吾人は塙國と親交を結ぶべし。決して其勞を厭ふべからず。陽に彼國の獨逸に於ける擴張策に同意え、陰に他の諸小國を指嚇えて塙國に對する嫉妬心を起さめ、兩黨中孰れか一をして吾人の援助を仰ぐに至らめ、機に乗じて保護政略を用ひ、將來此國を占領するの階梯となすべし。

十一、埃國をえて歐洲より土耳其人を驅逐するに意を用ゐしむべき。而て一旦我國がコンスタンチノープルを占領せば、彼國必ず我を恨み我を嫉まん。此に處するの途二あり。一は彼をして歐洲諸國と干戈を交へしむると、一は我略取せる一地方を與ふると、但し其與へたる土地は機を見て必ず取還すへし。

十二、ハンガリー、土耳其、南ポーランドに散在せる 그리스人の心を服し、希人をして我の扶助を乞はせめ、先づ宗教上の主權を握り、以て政治上の主權を握るの基を開くべき。

十三、スフィンデン我有に歸せ、ベルシャ滅び、ポーランド亡び、土耳其服せ、我陸軍完成せ、黒海、バルチック海又共に我領海となるの曉には、我は潛に及た別々に先づベルサーニ宮廷に、次にパリ宮廷に、世界分割の交渉を試むべき。若し二國の中孰れか一國此を諾せば、其國の兵を利用して他の一國を討伐せしむべき。而て此事効を奏せば、我又口實を構へて殘余の一國を攻むべき。此時に當りては我已に全東洋を領せ、歐洲の大半又我か有たるを以て、其勝敗の肩問はすまで明なり。

十四、若し兩國共に我交渉を拒絶せんか。我は兩國間に軋轢を生ぜしめ、互に相屠らしめ、機を熟するを待ち、我精銳を擧げて獨國に進め、又た亞細亞軍隊を載塔せる一大艦隊を編制し、一はアゾフ海より、一はアーチヤンセルより出帆せしめ、地中海より大西洋に出て、佛を攻め此を降し、獨を討ち此を滅ぼすべき。獨佛我に服せんか。他の歐洲諸國は乃に血ぬらずして風を望んで降を乞ひ、天下の事知るべきのみ。此に於てか、歐洲盡く我領とならん、否必ず我領と爲さるべからざるなり。